

非実在 ~Airmys~ 探偵小説研究会

エアミステリ



非実在探偵小説研究会 6号 目次

企画

企画1 フーダニット・ホワイダニット競作

罪に罰

森煮豆仁

..... 6

首吊り屋敷の密室

根倉野蜜柑

..... 35

匣の中の少女

麻里邑圭人

..... 53

複製人間が多すぎる

佐倉丸春

..... 101

メキシコ翡翠の謎

光田寿

..... 116

守居烏亞弥子の狂人理論

紫藤はるか

..... 160

企画2 ショート・ショート

..... 219

その他

(エッセイ)エアミス研入門〜私的エアミス概説〜

田中大牙

..... 208

(ミニコラム)私が偏愛するマイナー作品介绍

..... 263

表紙・扉ページイラスト、117ページ見取り図

ウスダアヤ

53、160ページイラスト

あじさい

首吊り屋敷の密室

根倉野蜜柑

序

事实上「虚無の会」の指定席となっている学内食堂の一角に、ぼんやりした幽霊のような女がふらりふらりとやってきた。すでにそこで無駄話に花を咲かせていた四人にむかつて、彼女は挨拶もなしに提案した。

「犯人当てをしましょう」

幽霊のように青白い女、紫藤佐紀しどうさきの発言に、「虚無の会」の会員たちは顔を見合わせた。

「犯人当てって、あの犯人当てですか」

眼鏡をかけたおとなしそうな青年、街坂優人まちざかゆうとがあまり意味のないことを佐紀に訊ねた。

「良いじゃない犯人当て。今までやらなかったものね」

佐紀と対照的な明るさを伴った調子で、やはり髪色も明るい桜庭亜里沙さくらばありさがそう言った。

「佐紀ちゃんが書いたのか。やたら捻ってありそうだ」
むしろ期待している顔で言ったのは、街坂よりは周り

の空気が軽やかな五十嵐巡いからしめぐるだった。

「仕切っているけど佐紀、その問題を書いたのは私よ」

佐紀の双子の姉、生真面目そうな紫藤佑香しどうゆうかが慌てたように割り込んで、それからすこし気まずそうに続けた。

「まあその、佐紀には推敲してもらったし、私が講義に出てるあいだに、印刷作業もやってもらったけど……」

大学の非公認サークル「虚無の会」に所属する五人の共通点は、みな推理小説を好んで読むことだった。

五十嵐が現会長で、街坂と意気投合して二年前にこの会を立ち上げた。五十嵐と知り合っただった亜里沙が佑香を連れてきたので、最初の一年間はこの四人で細々と活動を行っていたのだが、今年に入つて、佑香が双子の妹である佐紀を連れてきたのだった。

「つまり、その犯人当ては紫藤姉妹の合作ってことだな。ますます手強そうだ」

「書いたのは初めてだから、期待に沿えるかどうか」

「わたしたちも、もう一度読みましょう」

佐紀が鞆から綴じられた紙の束を取り出し、机でとんとん整えながら、佑香に提案した。

「ホチキスまでやってくれたの。ありがとう佐紀。そうね、問題ないと思うけど、いちおう読み直しましょう」

祐香は頷くと、紙束を受け取って皆に配った。

「みんな読み終わったら質問がないか確認して、それから推理する時間を設ける、ということの良いかな」

五十嵐の言葉に、四人は同意を示した。

「へえ、首吊り屋敷の密室……」

紙束を渡された亜里沙が題名を読んだ。

「佐紀らしいタイトルね」

「書いたのは私だってば」

祐香がふくれた。五十嵐が笑いながら言う。

「密室ものか。良いね、俺けっこう好きなんだ」

「あら、あたしだって密室ものは得意よ」

亜里沙が張り合った。

「佐紀さんがやった推敲って、具体的には……」

街坂が訊ねた。

「伏線を追加したり、表現を変えたり、小さなことよ」

佐紀はあらぬ方向を見つめながら答えた。

それから皆、紙束に集中しはじめた。

* * *

「虚無の会」合宿（第1章）

「合宿をしましょう」

紫藤佐紀の提案に、「虚無の会」の会員たちは顔を見合わせた。

「合宿って、あの合宿ですか」

街坂優人があまり意味のないことを訊ねた。

「良いじゃない合宿。今までやらなかったものね」

桜庭亜里沙が楽しそうに言った。

「本当に殺人事件が起こったりしてな」

むしろ期待している顔で言ったのは、五十嵐巡だった。

「面白そうだけど佐紀、合宿先のアテはあるの」

佐紀の姉、紫藤祐香が訊ねた。ふたりは一卵性双生児

だったが、ほとんど外出しない佐紀の皮膚は陶器のように蒼白なので、すぐに見分けることができた。

「わたしたちの家はどうかしら。祐香の帰省も兼ねて」

どこか浮いた、抑揚の薄い声で佐紀が言う。それを聞いて、祐香は顔をしかめた。

「虚無の会」は、大学非公認の推理小説サークルだった。

五十嵐が会長、街坂と亜里沙、祐香の三人が会員。祐香

五十嵐が会長、街坂と亜里沙、祐香の三人が会員。祐香

の双子の妹である佐紀は学生ではないが、彼女も怪奇小説の副産物として、推理小説をよく読む。今年から姉に連れられて何度も会合に参加しており、ほとんど会員のひとりになっていた。

「佐紀たちの家って、三人も泊められるほど広いの」

亜里沙が声を弾ませた。

「地元では、丘の上の首吊り屋敷と呼ばれています」

佐紀は淡々と言った。

「屋敷かよ。それに凄い名前だ……。ミステリというよりホラー寄りだけど。なにか由来があるのか」

五十嵐がさつそく訊ねた。

「到着してから話したほうが、趣があるでしょう」

「曰くつきの屋敷……。合宿には最適の舞台ですね」

街坂も頷いた。

「あとは佑香だけね。もう三年も帰って来ていないけど、帰省はいやなのかしら」

佐紀に問われた佑香は、答えずに下を向いた。彼女は佐紀のこういう喋り方が苦手だった。

佑香はこの大学への進学を機に、学校の近くの下宿で一人暮らしを始めた。佐紀の揶揄するとおり、それから

一度も実家には戻っていない。同じ歳の佐紀は高校を卒業してから「首吊り屋敷」に留まって、すでに他界した両親の遺産を食い潰して生活している。

「あの家は……その、三年もあなたひとりで住んでいたし、これから大掃除をしても、ひとを泊めるのは難しいんじゃないかしら」

「わたしが毎日かかさず掃除をしているわ」

「でも……」

五十嵐は、佑香がなにか言えないでいるのに気付いた。

「それでは佑香には、わたしたちが泊まれるような場所と値段で、街坂くんの言うような曰くつきの宿泊施設を見つけられるのかしら」

亜里沙と街坂も、ふたりのやりとりの微妙さに気付いたようだった。しかし、止めに入ることはできなかった。

「……分かったわ。私たちの家でやりましょう。余計なお金もかからないし、事件の発端になりそうな陰惨な話もあるし、『虚無の会』には都合が良いものね」

そう言った佑香の語気は、若干強かった。

ともあれ、こうして五人は大学の春休みに、「首吊り屋敷」で合宿をすることになった。

首吊り屋敷（第二章）

当日は風が強く、朝から曇っていた。午前中に最寄り駅に集合した五人は、紫藤家のある山の麓までバスに揺られ、そこから歩いて舗装されていない山道を登った。

「佐紀、こんなところに独りで住んでいるんだ」

一時間ほど歩いて屋敷に辿り着いたとき、亜里沙は思わずそう言った。男ふたりも珍しげに屋敷の外観を眺めている。二階建ての潇洒な洋館だったが、荒れ放題だった。手入れをする者がいないのだから当然だ。

風が強いので、五人は急いで玄関扉をくぐり抜けた。

「一階に食堂や談話室、お風呂にお手洗い、それにわたしたちの部屋。二階には客室が六部屋あります」

買い溜めた食材をしまうと、一行は二階へと上がった。

二階には二〇一号室から二〇六号室まであった。机やベッド、クローゼットが壁に寄せてある簡素な部屋だ。天井の蛍光灯のとなりに、もうひとつ金具が嵌め込まれている。窓は一箇所。扉はそれぞれ内側から錠でロックでき、外側からはルームキーを使って錠を操作できる一般的なものだった。

「二〇二が物置になっていているけれど、他の五部屋から好きなところを選んでください」

佑香と佐紀には自室があるが、せっかくなのでふたりとも、客室で寝ることにした。

「ちなみに『首吊り屋敷』の由来となった部屋は二〇三です。泊まりたい人はどうぞ」

事情を知らない三人のあいだで遠慮がちな笑いが起こったが、名乗り出る者はいなかった。

部屋割りは、亜里沙が二〇一、佑香が二〇四、街坂が二〇五、五十嵐が二〇六、そして曰くつきの二〇三には佐紀が入ることに決まった。

部屋を決めた者は、佐紀からルームキーを受け取った。金属製の鍵に、部屋番号の彫られたプレートが金具でぶら下がっているものだった。

続きは「非実在探偵小説研究
会6号」でお楽しみ下さい。

企画2

ショート・ショート

企画のルールは以下2点。ネタのジャンルは広義のミステリ（ゆる〜い感じで）、文字数は400字詰め原稿用紙10枚以内。

バラエティーに富んだ作品10編が集まりました。では、どうぞお楽しみ下さい。

◇ ショート・ショート目次 ◇

スフィンクスの謎	佐倉丸春	220
悪魔	麻里邑圭人	223
『顔』	角州克矢	226
消失感	光田寿	232
密室／証拠	森煮豆仁	236
このどうしようもなく荒んだ世界でキミは	稲羽みのり	240
本格ミステリ検閲官	田中大牙	245
名探偵の末路	根倉野蜜柑	249
Sunny Day Sunday!	船橋浩司	254
教誨 Inversion	紫藤はるか	258



非実在探偵小説研究会 ～Airmys～ 6号

発行日 2013年11月4日
発行 エアミステリ研究会
連絡先 airmysdj@gmail.com
<http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>
価格 850円
印刷所 株式会社ポプルス

Special Thanks

編集作業をお手伝いして下さったエアミス研有志メンバー

©2013 エアミステリ研究会 作品の著作権は各著作者に帰属しています